

であったと言えよう。

国策の名のもとに緞肩に日本海を渡った、まだ十六、七歳の若い人であろう。八月十日頃から十八日頃まで、死亡した人々はたくさんいるはずだ。消息不明となっているのだ。満州国土の土となり、あれから五十三年は流れた。彼らの前には一枝の花もないのである。私も、はや七十五歳の老齢である、記憶のあるうちに書き残しておこうと思ひ筆を取ったのである。

あとがき

私自身の、義勇隊、捕虜の十年間、歩んできた道は、ただ踏まれても踏まれても雑草のように立ち上がる、気力だけであり、雑草は強い意味で何らかのお役に立つならば、この上もない幸福なことであります。

なお、記載したものは、「全貌第四十六号」「消えた青年義勇隊」から抜粋しました。

最後に、義勇隊として青春のすべてを捧げ、不幸にも加護なく亡くなられた拓友に、心から御冥福をお祈りいたします。

朝露のたまゆらにして消ゆるごと

君はうつせし世を去り給ひたり

死に水も 凍りて飲めづ

捕虜ゆけり

シベリア回顧録

富山県 窪谷好信

鮮烈な記憶をたどり

抑留中の強い印象をよみがえらせ、当時の心境を再現し、生涯最大苦難の経験を顧みる、ここに平和の尊さと戦争の愚かさを改めて世間の人たちに知ってもらいたいものである。

強制連行

武装解除に次いで敦化周辺の部隊は、沙河沿飛行場の原野に集結させられ難民化した将兵は天幕野営することとなる。何もすることなく唯一その日の食糧調達に畑荒らしに出掛けたり賭博にふけったり、あてど無い毎日を送る。やがてソ連は千人単位の大隊を編成し

「トウキョウ、ダモイ（東京へ帰るのだ）」と言いふらし貨車に積み込み乗車し、行き先不明のまま列車は発進する。むやみに暴進したり、数時間も停車したり、所在がさっぱり分からない。大きな駅の引き込み線に長時間止まる。誰かが「ここはハルビンだ」と知らせてくれた。ここから南下して大連港より帰国するのだろうか」と誰もが独り決めをしている。

列車は動いた。西へ西へと大興安嶺の山中へ、夜が明ければ東の空から太陽は昇る。磁石は無くとも確実にシベリアに向かって西へ進行している。満州里を過ぎればもはやロシアであり、シベリア鉄道をモスクワ目指して駆けている。まさかヨーロッパ回りはあり得ない。だまされた、完全にだまされた。不信と不安が込み上げてくるがどうにもならない。どこまで行くのか何もかもまったく分からない。大海原とも思われる湖のほとりに停車したので、皆が水辺に駆け寄り顔手足を洗う。ひょっとしたら日本海でなかるうかとなめてみたが、バイカル湖であり、とうとうシベリアの中間に來たのだと知った。

こんな僻地へ輸送しどうするのか、様々の疑問やいやな予感がわいてくる。人知れぬ所で処刑されるのではなからうか、ユダヤ人のガス室虐殺が浮かんできてる。また、北海道の監獄部屋、佐渡金山の事どもを思い出した。しかし、国際法、国際連盟や赤十字があり、めったなことではできない、世界の各国が許さないだろう。心をいやし慰めるが、今はなるようにしかない敗戦の惨めさ悔しさをつくづくと味わわされた。

検査略奪

凶器による暴動や爆発物の恐れ防止のためと称して、度々身体検査を行い器具や所持品を調べ、ナイフ、はさみ、きりはもちろんのこと腕時計、万年筆、ペンシル、磁石などを見付けしだい有無を言わず取り上げる。検査の実施は抑留者の小物を巻き上げ、彼らの私物化が目的である。しかし、役立たない貨幣、眼鏡などは免れる。

沙河沿へ集結の行軍中に監視兵（カンボーイ）が自動小銃（マンドリンと呼んだ）を突き付け、肩掛から

下げている図のうに目をつけ、「ダバイ、ダバイ（よこせ）」とせがまれる。困ったことになったが、渡さねば発砲しかねないけんまくである。どうせいつかは取られると思っていた。ただ中身の残す物を調べて渡す余裕もなく、やむなく即座に渡さねばならず残念であった。

夜間に護送貨車を降りて点呼が終わり、事後の行動を待っている時に、現地の大男二人が襲いかかり、持参のリュックサックをひったくり、薄暗闇の中、鉄道線路下通路を抜けて逃げて行くのを見たがどうにもならない。大切に持ち堪えた天幕、予備の衣類、靴下の米、飯盒、水筒、家族の写真、愛用の尺八などの私物をそっくり持って行かれ着たきり雀となる。

シベリアは囚人泥棒の僻地と聞いていたが、第一人目の被害者となる。途方に暮れながらいすことも知らぬ行進が始まる。検査と略奪にさんざんな目に遭い、裸一貫厳寒のシベリア大地に投げ出される。

後に知ったのだが、関東軍すべての戦利品物資（兵器・弾薬・糧秣・資材）および在留邦人の財産は、昼

夜かけてソ連へ輸送された。そうして抑留者当面の食料は満州で略奪した物が給与されたのであった。

盗み食い

抑留者の給与は絶対に少ない食料であり、我らには死活問題であるが、ソ連はいっこうに改善してくれない。背に腹は代えられない、生きるためには理性も無くなる。恥も外聞もあるものか、悪事も承知の上のこと、まして捕虜にはその日暮らして食うことだけが命の綱である（二十三年頃より改良された）。

一、護送中ある町で使役に出される。それは塩肉貯蔵庫の整理作業である。雑多な塩漬の肉類が樽や箱詰、また、ばら枝肉が無造作に置かれている。仕事もしたが、盗み食いは堂々とできる。しかし、持ちだしは検査が厳しくできないと指揮者は前もって言ったので、塩辛い生肉を腹いっぱい獣のように貪り食って、そのうえ少しばかりを下着の間に隠して無事に帰る。体温で解け柔らかくなり体じゅうが臭い。それよりも喉が渴いて生水を飯盒でたらふく飲んだが腹が痛くならなかった。

二、収容所入り当初の頃、馬屋の馬糧（大豆油搾りかすの豆板・麦類・岩塩）をかすめ取りする。

三、貨車内側の横棧に残った岩塩を失敬し、かき集め、ポケットに入れて帰る。しかし、石炭の粉と混合しており、仕分けするのに一苦労した。

四、炊事場よりアワの選別殻を取り寄せ、煮て食べたが、ふん詰まりになり、本当の「泡食った」で悩まされた。

五、収容所内夜間廁の帰りに運搬中落とす物の枝肉一本を拾う。独りで食べ仲間にあやしまれたが、確かに拾った物で、届けなかったまでであった。

六、入院中に病院の炊事手伝いに行き、役得でかゆを勝手に何杯も食ったが、下痢もしなかった。

七、農場でジャガイモ収穫には大きな芋を公然と持ち帰るが、監督は見て見ぬふりをしている。家畜大根・カボチャは自由であるが、まずくて敬遠ぎみであった。

野草で飢えしのぐ

給与基準が決められているが、守られていない。そ

のうえ特に食料品は満州から戦利物資として大量に輸送して来たが、ロシア人も不足しているので運搬配給の途中で横領抜き取りされ、さらに少なくなっている。給食の減量・カロリーは在満当時の半分以下であり、寒気と労働に耐えられないで多くの者が栄養失調となり、餓死するものが続出することとなった。

「衣食足りて礼節を知る」ことは不可能である。なにかんづく「食」は抑留者にとっては生きんがための第一条件である。「食」を満たすために金銭は使えない。交換物は皆無となり、逃亡も無理である。辛うじて、盗み食い（前記）のチャンスも少ない、ただ自然の恵みの山野草で飢えをしのぐのみである。これとて冬の間は何も得るものはない。

シベリアに遅い春が来て、大地は一斉に躍動し山野に緑がよみがえる。名も知らぬ草や実を摘み腹を膨らませる。馬が食べるから毒がなからうと少しぐらい苦い酸っぱいは問題にしない。一般に野草はあくが強く茹で汁を捨てれば食えないこともない。栄養価・ビタミン・有害があらうとなかろうと、とにもかくにも満

腹感が得られればそれで良かった。夏は白樺の皮を傷つけ樹液を空き缶に集めて「白樺泉」と名付け喉の渴きをいやした。秋は木の実やキノコを無差別に採取し口にしたが、不思議に腹痛、中毒、下痢など起こらなかった。

天然の恵みとはいえ、採集するには、労働は休憩時間もなく作業の監督や監視兵の目をかすめ隠れて素早く動かなければならない。逃走かと発砲されたり、サポータージュだとどなられる。また、非情にも茹でている飯盒がけ飛ばされることもしばしばである。大自然の無料の贈り物、救いの糧を得るには、危険を越えた命がけのことや、作業のすき間を狙って行う大仕事であった。

シラミと南京虫

軍隊でも不潔不精者にはシラミが宿った。満人労働者にも多く、彼らはいわく「死人にはシラミはいない。いるのは生きている証拠だ」と言う。もつともなことであるが日本人は、「八つ手の観音様」と皮肉ったが大いに嫌っていた。また、伝染病発疹チフスの媒

介をすると言われ恐ろしがられた。

沙河沿野營滞在頃より入浴、洗濯ができず、シラミが発生し護送中は大蔓延となる。体じゅうがむずがゆいが、寒くて裸になりシラミ退治も不可能で致し方がない。食糧不足でやせ劣る肉体に更に拍車をかける吸血悪魔である。収容所に入りようやく衣類の熱気消毒（針金の輪に着衣を通し高熱乾燥）が行われる。しかし、卵は完全に死ななかつたのと、衣服は他人のものを取り違えられたり、外套一枚着て待つこと、皮製品は硬くなるなど思わぬことが生じた。

病院や農場の木造宿舎では南京虫の襲来に悩まされ睡眠不足となる。寝静まる頃より天井から落ち、床板のすき間から現れ肉体に食い込み、掻くと頭がちぎれて残り、赤くはれあがる。暗くて見つけ難く手探りの退治では効果が無く見舞われ損である。幕舎住まいは狭くて寒かったが懐かしくなった。

シラミ、南京虫の他に蚊、アブ、ブヨの吸血鬼がおり、夏場の作業現場は昼でも蚊やアブに刺されたり、草むらではブヨの大群に襲われる。シベリアは極寒地

で万物凍結の長い冬があるのかかわらず、これら昆虫の生命力のたくましさ堪比べ、我らのか弱さを嘆くばかりであった。

重労働に耐え

シベリア抑留は極寒と飢餓、さらに過酷な労働に強いられ、命の限界まで耐え忍ばねばならない。実弾こそ飛んで来ないが戦闘の第一線に等しいものであり、まさにこの世の地獄のごときである。

一 水汲み（炊事・浴場・うまや用など自活のため）

馬の扱い経験者（わずかに機関銃隊で駄馬訓練）に選ばれる。所外の井戸でつるべおけで水を汲み上げ、ウオチカ（木桶）にあげ馬そりに乗せ運搬する。井戸端および通路は水がこぼれて凍り、凸凹の滑り道を防寒服装で歩くだけでやっつである。そのうえに蹄で踏まれて転ぶ恐れがあり、命がけの甚だ危険な仕事である。いっぱい汲んだ水は着いた時には桶蓋がないため半分になり、能率が悪く二倍の労力を要した。

二 木材運搬（伐採生丸太を集結）

枝の散らばった山林斜面に無造作に放置の針葉樹を二、三人でかつぎ運び積み上げる。雪を払いのけ、手ごろな材を選び持ち上げるのにやせた体では力が出ない。たどたどしい足取りでつまずかないように歩く。三人の肩が合わない、切り枝の残りが肩にあたり痛い、松やにで汚れる、雪道で滑るなどの難行苦行、そのうえにノルマを上げるとせき立てる。あまりに酷いので木材を投げ出して動かなかった。早速、監督が来て、わめきちらし、け飛ばし、突き倒された。仕方なく続けたが、後で何か罰せられると覚悟していた。しかし、その場限りの制裁で終わった。

三 側溝掘り（鉄道路床に排水溝を造る）

長さ五メートル、幅、深さとも約一メートルの側面斜め底の溝掘りを、五人組ごとに割当の請負仕事である。堅い凍土のため十字鍬は跳ね返ってきて役に立たない。そこでたき火をして土をやわらげて掘るが、表土二十センチほどしか効き目がない。初めのうちは、日本人の癖で、早く終わって休もう、他の組に負けてはならぬと一生懸命に無理をする。完了すれば無論ノ

ルマが上がるが、過酷な労働を自ら求めていた。しかし、ロシアのために犠牲になることもなからう、体力をすり減らしてまで競うことはばかげたことである。時間が来れば帰れるのにと、我が組は負けるが勝ちと決め込んだ。掘り終わった溝は凍結し明日は誰が掘るのか分からない、その日その日の日雇い人夫であった。

四 ターチカ運行（一輪車を押し土運び）

岩山を爆破した土を板張り木製の鉄輪車に積み、狭い道板の上をたどり谷に捨てる作業である。積み込み、運搬もなかなか休むことなき骨折りの原始的な連続労働である。道板にこぼれた土に乗り上げ脱線転覆、板の継ぎ目にはまる、車ごと谷に落ちるなど、腕力の操り方に一時も気をゆるがせにできない。やれやれと捨て場に立っていると、「ターチカビリー（一輪車握り動け）」と監督の大声がこだまする。のろのろでも動いていなければならないのが情けなかった。

五 廁の糞尿掻き（収容所便所の汲み取り清掃）

野天の収容所内隅に溝を掘り板を渡しただけが便所

であり、同じ箇所を用便をするので、盛り上がり凍結する。夜間は特にお尻の危険予防が望まれる。そこで所内の軽作業であるが、鉄棒で「ピラミッド」を掻く使役に出なければならぬ。鉄棒一本を使うが、思うように扱えない。

倒すことはたやすいが運び出すのは至難で、幾分ならして済ませる。凍って臭みは少ないが、飛んだ水の粉が被服に着き幕舎に帰り暖まると解け出し、におうこと処置なしである。皆に迷惑がかかったが、誰も怒る者はいない。しかし重労働以上の出来事であった。

元旦の移動

昭和二十一年（一九四六）年十二月三十一日（大晦日）の晩十時、寝静まった頃、緊急に山田中隊数十人に移動命令が出される。私物をまとめてすぐに出発準備せよとのことである。持参する荷物は飯盒ぐらいで全く身軽でどこへでも行けるが、何事か知らないが背くわけにもゆかず、行き先も分からぬままに集合整理する。暗闇の中、住み慣れた第十一収容所を後にし夜行軍となる。数キロ歩いて夜中にどこかの収容所に編

入される。後に知ったが六十八キロ地点であり、当初下車した地点でタイシエットへ向かつて戻ったことになる。ここはバム鉄道建設当分の前進基地であるらしい。二十二年の元旦はとっさの移動で何が何だか慌ただしい一日であった。ソ連はなぜこんな日を選んで部隊の一部を動かすのか、疑問は尽きないが、聞くところによれば、日本人特に日本軍隊は元旦や記念日を期して事を起こすとされ、暴動、反乱、逃亡、団結等を恐れ、未然に防ぐために入れ替え分散の予防策を行ったにすぎなかったとのであった。この移動に当たったわが隊は不運と言うより他に言いようがなかった。

絶食の懲罰

日中の作業を終え疲れ果てて宿舎でぐっすり寝込んだ頃、我ら山田中隊が突然起こされる。文句を言っても通じない、不平を言いながら夜間作業に駆り出される。貨車の荷下ろしとのことで、駅でもない鉄道線路に停車中の無蓋貨車数両を指して冷えきった夜道を急がされる。数人の班に分かれて、レールを下ろす

作業である。列車が何十分後に発車せねばならぬから「ヤボンスキー、ビストラビストラ（日本人、おまえら、早く早くしろ）」とむちゃなことを言う。各貨車には重くて長い鉄道用レールが十数本太い鉄線で固定してあり、鉄棒でてこを利用して送り下ろせと言う。薄い月明かりの夜間の仕事は、まず鉄線を切ることからであるが、工具も無く鉄棒で叩き切るのに難儀する。二、三人ずつ双方に離れてレールの穴に鉄棒を突っ込み、掛け声合わせて回転とてこを利用しながら送り出す。悪戦苦闘どうにか下ろし終わったので早々と幕舎に引き揚げる。下ろしたレールは乱雑なため、貨車の横板を上げ閉じられないので、他の遅かった班が始末させられたとのであった。もっとも我々も貨車はうまく出られるかなあと感じつつ帰ったが、少しぐらいロシア人で何とかするだろうと思っていた。我らの仲間に迷惑がかかったことは気の毒であり済まない気持ちがあった。

翌日、早速大隊長より中隊長を通じて、我らにきつい叱責と共に一日絶食の体罰懲罰が科せられる。作業

は免除され幕舎内の謹慎であったが、営倉入りに相当する制裁を受けた。

栄養失調に等しい体に欠食は大変な仕打ちであり、日本人どうして罰し罰されるはめとなる。その後入院の遠因は、この事件であったのかと察せられた。

デマに翻弄

夢も希望もかなえることの不可能な抑留生活の歳月がいたずらに過ぎていくとともに、望郷の念が日増しに高まってくる。誰が言ったか、どこからともなく「東京ダモイだ（日本へ帰還）」と言う、帰国デマがまことしやかに飛び交う。

「今やっているこの仕事が終わればヤポンスキーダモイだ」と作業監督が言っていた。「奥地の者が仕事を終えて帰還するのを見た、すれ違った」、「この鉄道工事はドイツ人捕虜と交代になり日本人は帰国できる」など、まことしやかに、確かな根拠もなく、責任のないデマ宣伝に一喜一憂する。まったくのうそと思いつながら一時的慰めでもあり心の糧でもある。いつかはきつとかなえられることもあるだろうと念願する

日々であった。「ダモイ」は大関心事であり、ナホトカ出航まで幾度も唱えられ、だまされてきた。空飛ぶ鳥を眺め、羽があつたら何日かかっても故郷へ行ける鳥になりたい思いがする。せめて家族と文通ができれば生きがいも出てくるが、望みも願いもかなえられなかった。

祖国日本は、天皇が退位し、皇太子が即位となり、年号は「大新」と改元された。また、天皇制が廃止となり共産国家になった。内地は食料と輸送船不足で引揚者の受け入れができない悲観的な憶測など、ニュースかデマか確信の余地がないままいつしか消えていった。

年号改元は「エラブカ将校收容所で昭和二十一年十二月二十三日天長節の式をあげていた時にどこからともなく『天皇退位、皇太子即位、大新と改元』と伝えられたためである」と後の誰かの体験記に述べられている。この傑作デマが我々の收容所に流布されたもので当時はなるほどと信じていた。なお、『日本新聞』は民主化、共産化の報道が目的であったので、真意は

疑わしいものであるが、その頃は活字に飢えていたので一応ニュースの価値があったと思われる。このほかにマホルカ（刻み煙草）の巻き紙として大いに活用された。

民主化運動

ソ連は関東軍の將兵を將校と下士官に分け千人の大隊を編成し、大・中・小隊長は別部隊の下級將校を隊長にし、統率・団結の部隊組織を弱めてシベリア護送をなす。收容所においても隊長のほかは特に上下の別なく労働者として取り扱いをなす。ただ日本人側において階級制を固持したのにすぎなかった。しかし、かつての階級権力や学歴博識はもはや労働力には不要であり、歳月が経つにつれ差別から平等の思想が高まってきた。

ソ連は軍隊を骨抜きにし、共産党を礼賛し、労働歌を奨励し、赤化と民主化の工作に乗り出す。これを受けて同志が立ち上がり、所内の空気は次第に変化していき、やがて『日本新聞』が配布され民主化運動に拍車がかかってきた。初めはソ連が例のたましの手であ

ると思っていたが、とらわれの身では仕方がない。猫をかぶってなびいていれば彼らは喜ぶだろうと考えていた。しかし、連日の民主化運動で抑留中だけでも共産党になったほうは得策であると決めていた頃、山田中隊の移動、間もなく入院となり民主化運動の旋風に当たらなかつた。

「ダモイ」

夢にも見てきた帰国は抑留者の終戦以来の念願である。ハーリック農場での収穫も終え、マルタ收容所へ戻って身体検査を受けた直後に、凶らずも帰還の知らせが届く。これまで何回となく「ダモイ」とたまされ続けてきたので信じられない。間もなく少数の仲間と貨車に乗る。また「どこへ連れて行かれるのか」と思っていたが、同乗の同志たちの様子がおかしい。列車は東に向かって進行し、やがてイルクーツクを過ぎる。チタ、ハバロフスク、次いでナホトカに到着し、收容所に入り出航待ちとなる。その間、度々身体所持品の検査があり、乗船するまで気持ちが悪くなるまい。いよいよ岸壁に立ち、日本の輸送船甲板上に白衣の看

護婦さんが手を振って迎えている。タラップを踏み締め確実に帰国をかみしめた。

昭和五十年二月二十八日

夜子と結婚する

北陸電力株式会社を定

年退職する

昭和五十五年二月二十九日

北電産業株式会社を定

大正九年二月十七日

富山県西礪波郡西五位

昭和六十三年一月二十三日

年退職する

昭和十三年三月五日

村土屋に生まれる

昭和六十三年一月二十三日

妻小夜子と死別する

昭和十三年三月五日

富山県立高岡商業学校

平成二年四月

福岡町老人クラブ連合

を卒業する

平成三年四月

会副会長となる

五月二十日

高岡電燈株式会社石動

平成三年四月

福岡町ゲートボール協

支社に入社する

平成三年四月

会会長となる

昭和十六年二月十日

敦賀歩兵第十九連隊に

四月一日

郷土史「土屋史」編集

入営する

四月一日

発行する

二月十七日〜終戦

満州国東部ソ連国境地

十二月一日

浄土真宗本願寺派五位

帯に駐屯する

十二月一日

組「二十五日講誌」編

終戦〜昭和二十二年十月

シベリア、タイシェツ

平成四年四月十日

集発行する

ト地区に抑留される

平成四年四月十日

句集「生甲斐」発行す

昭和二十二年十一月一日

帰国・復員・北陸配電

平成五年三月末日

る

株式会社に復職する

平成五年三月末日

福岡町「ゲートボール

昭和二十三年四月八日

水島村胡麻島の浦田小

平成五年三月末日

の歩み」発行する

十一月八日

富山県知事より厚生功

労表彰状を受ける

十一月二十三日

福岡町長より地方自治

発展の功績に対し表彰

状を受ける

平成六年二月十七日

「シベリア回顧録」

(自分史の一部分)を

発行する

(富山県 山田 秀三)

私の抑留中の思い出

富山県 室 田 幸 雄

終戦後既に五十数年が過ぎて、時の流れと私の老化で記憶が薄れ、多くの事を忘れてしまいました。それで思い違いの事もあるかもしれませんが、私の生涯での悲惨な思い出の一つとして、できるだけ多くの事を思い起こして書き残してみようと思います。何かの参

考になれば良いかなと思います。

私、昭和十九年(一九四四)年九月に軍隊に召集されて、昔の満州ソカトン飛行場(今の藩陽、旧奉天の近く)に陸軍飛行兵として補給中隊に配属され、戦闘機や爆撃機への人員、物資、燃料、武器等の運搬のための自動車、側車の運転を主に兵隊としての訓練を受けました。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が満州へ越境侵入して来ました。そのとき私は公主嶺の学校にいましたが、急遽体一つで原隊に飛んで帰り、一睡の暇もなく防戦迎撃の準備に追われました。敵の攻撃から守るべく兵器を移動し穴を掘って隠したり、終戦になるまでの一週間、食べる間も惜しみ、ほとんど眠ることもなく徹夜で作業に追われていました。体はくたくたに疲れ果ててしまいダウン寸前でした。

十五日午後我々はラジオの周りに集合させられ、日本が無条件降伏した、戦争に負けたと知らされました。私は深い悲しみとむなしさで涙があふれてきました。しかし反面これで楽になれる、もしかして日本に